

四絡地区遺跡発掘調査報告書

1992年3月
出雲市教育委員会

四絡地区遺跡発掘調査報告書

はじめに

出雲市四格地区は、市指定史跡の矢野遺跡など拠点的な大規模集落遺跡として知られており、荒神谷遺跡・西谷墳墓群などの著名遺跡との関連も指摘されています。現在は、新興住宅地として急速に開発が進む一方で、出雲健康公園（出雲ドーム）が建設されるなど新たな市の中心地としての開発も進んでいます。今回の調査が、開発と遺跡保護を円滑に進めるための基本資料となれば幸いです。

おわりに、本書刊行に当って御指導、御協力を賜わりました関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成4年（1992）3月

出雲市教育委員会

教育長 松元昭憲

例　言

1. 本書は、出雲市教育委員会が平成3年度に、国庫および県費の補助を得て実施した四
経地区発掘調査の報告書である。
2. 調査は、矢野遺跡の発掘調査の他、四経地区の遺跡分布調査を実施した。
3. 発掘地は次のとおりである。 A地区－出雲市矢野町175-1他 B地区－出雲市矢野
町160他
4. 調査組織は次のとおりである。

調査指導者 田中義昭（島根大学法文学部教授）

丹羽野裕（島根県教育委員会文化課主事）

事務局 川上 稔（出雲市教育委員会文化・スポーツ課係長）

調査員 松山智弘（出雲市教育委員会文化・スポーツ課主事）

米田美江子（出雲市教育委員会文化・スポーツ課臨時職員）

遺物整理 矢田愛子・河井栄子

5. 調査にあたっては、土地所有者をはじめ、地元の方々から多大な協力を賜った。記し
て謝意を表します。
6. 本書の執筆は、調査員が協議して行った。
7. 本遺跡の出土遺物は、出雲市教育委員会で保管している。

目　次

1. 位置と環境	1
2. A地区的調査	4
3. B地区的調査	10
4. 四経遺跡の概要	12
5. ま　と　め	16

1. 位置と環境

出雲平野は、斐伊川・神戸川の堆積作用によって形成された沖積平野で、東では斐伊川が平野を北に流れ、島根半島の連山に沿って東へと流れを変える。西は、浜山砂丘その向こうは、日本海となり孤立的な平野地帯となっている。このような景観は、近世になってからで、それ以前は、現在の神西湖が内陸部まで入り込んでおり『出雲風土記』の「神門水海」を形成していた。また斐伊川は西流しており神戸川と同様神門水海に注ぎ込んでいた。

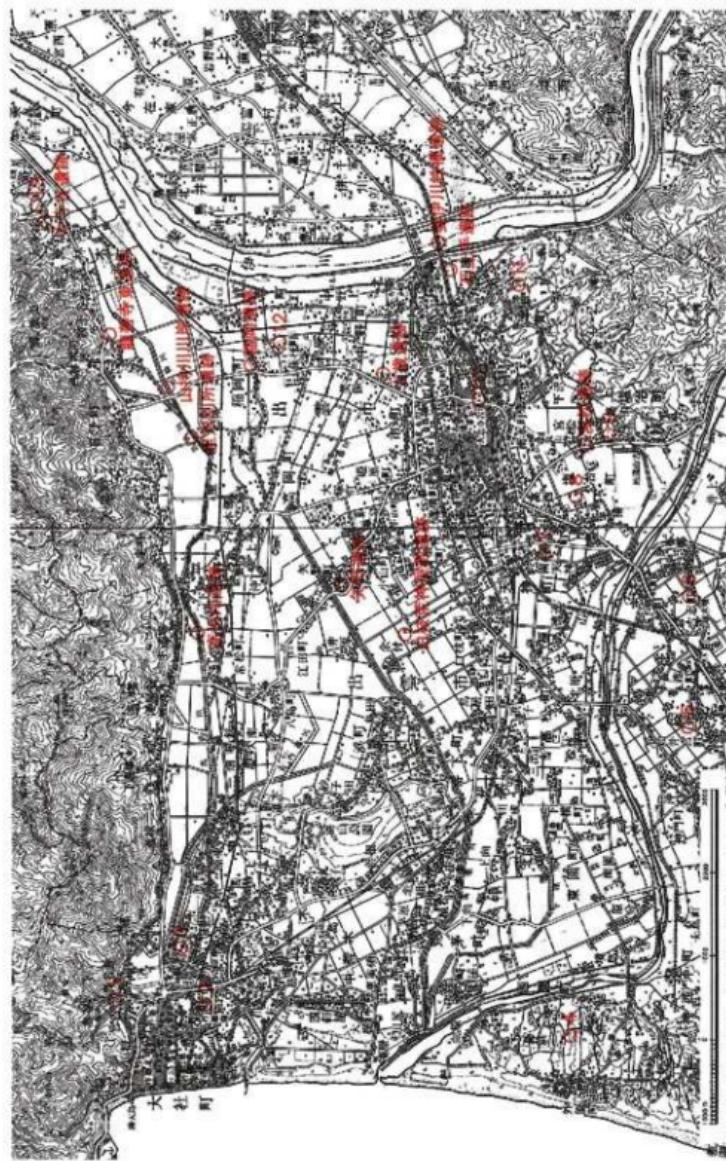
海水準の変化による平野の形成過程に左右されながら縄文後晩期になって、ようやく平野部にも遺跡が出現する。神門水海の汀線付近に位置すると考えられる矢野遺跡・神戸川の平野入り口付近の微高地に立地する三反谷遺跡がこれである。北山南麓は、縄文早期の斐根遺跡、後晩期の原山遺跡・大社境内遺跡が知られておりいちはやく生活の場となつた地域である。

弥生時代に入つても大きな変動はなく縄文後晩期の遺跡がそのまま継続する。「入海」が外界と隔離され「神門水海」の原型である潟湖が形成される後期になると集落は急増する。中期から継続するものとしては、多聞院遺跡・天神遺跡・田畠遺跡・古志本郷遺跡がある。これらの遺跡は、「神門水海」の汀線を取り囲むように分布している。また、高浜川遺跡・山持川川岸遺跡・白枝荒神屋敷遺跡など、低丘陵にも出現する。しかしながらこれらの遺跡は、存続期間が短いという特徴を持っている。

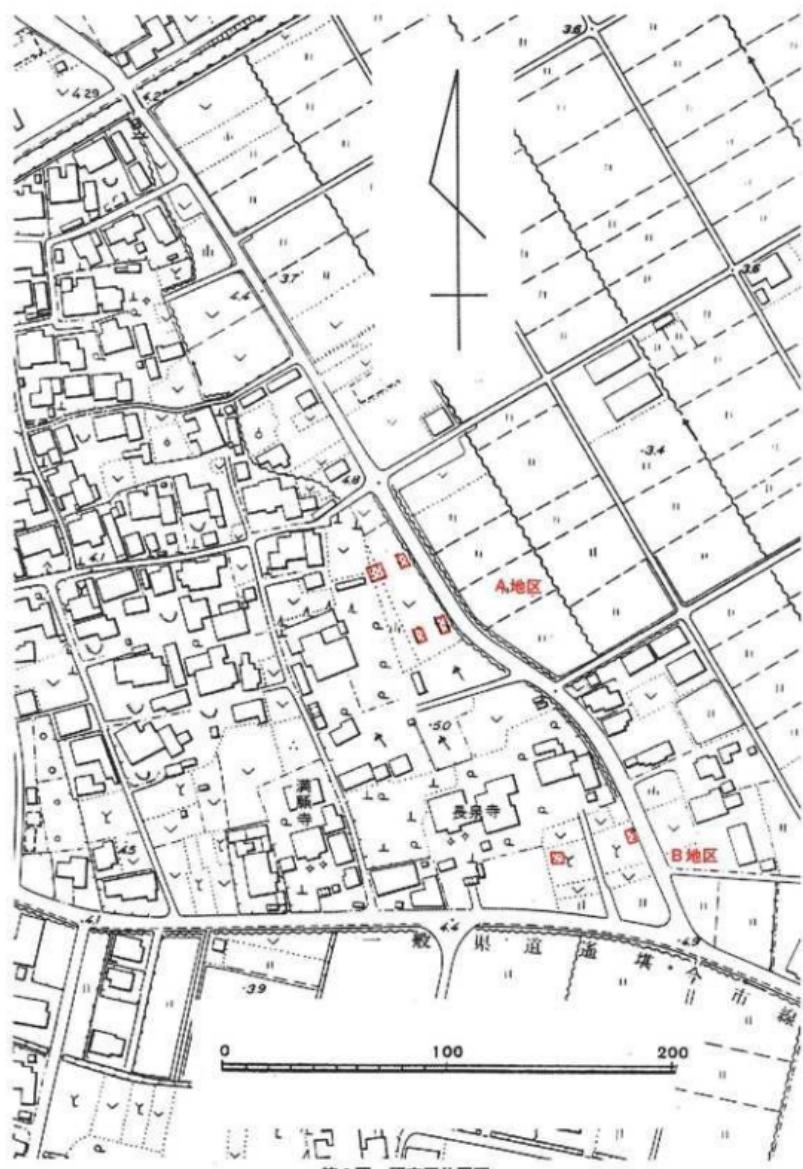
以上のような、集落の発展を基盤にして、西谷墳墓群の6基の四隅突出型墳丘墓が築かれる。

現在、西谷墳墓群につづく前期古墳は、今のところ知られていないが、北山南麓の平田市との境に、大寺古墳（前方後円墳・全長50m）が築かれる。竪穴式石室を内蔵しており、鉄鍬・鉄斧が出土している。また、出雲市西端神西湖に面したところに山地古墳（円墳・全長24m）が築かれ、第1主体・第2主体より、鏡・筒形銅器がセットでそれぞれから出土している。中期の古墳としては出雲平野西部の北光寺古墳（前方後円墳・全長65m）、神西湖南東の丁之内古墳がある。後期になると、神戸川右岸に大念寺古墳・築山古墳・地藏山古墳、左岸には、妙蓮寺山古墳・放レ山古墳・大梶古墳また、両地区に上塙治横穴墓群・神門横穴墓群など島根県下でも最大規模の横穴群が築かれる。

奈良時代になると水きり瓦の出土した神門寺境内廃寺や長者原廃寺が建造される。また、菅沢古墓・朝山古墓など骨蔵器や、小坂古墳に追葬されている石びつなど火葬がいちはやく行われていたことがうかがえる。



第1図 出雲平野の主要遺跡と紹介道路の位置図
 1. 大社境内遺跡 2. 鹿嶺山遺跡 3. 原山遺跡 4. 上長浜遺跡 5. 知井宮多聞院跡 6. 田嶽遺跡 7. 天神遺跡
 8. 神門寺境内佛寺 9. 上塙治桑山古墳 10. 大念寺古墳 11. 西谷塙基群 12. 桜井古墳 13. 大寺古墳



第2図 調査区位置図

2. A地区の調査

(1) 1トレンチの概要

1トレンチは、調査区Aの南東に、南北4m・東西6mで設定した。このトレンチの層序は、耕作土のみで、その下は黄色シルト層（地山）である。この下は砂礫層となる。これは、土地改良等によって遺物包含層が削られたことによるものとおもわれる。黄色シルト層上面の標高は、3.4mで、この面で東西にのびる溝の一部を検出している。これに続く溝を、2トレンチでも検出している。

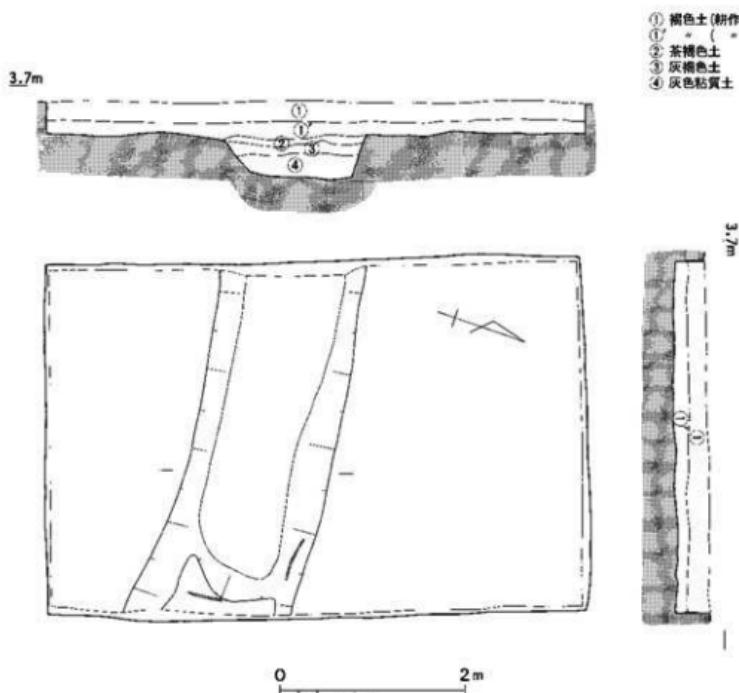


図3 第2トレンチ遺構図

(2) 2トレンチの概要

このトレンチは、1トレンチの西1.5mに設定した。層序は1トレンチ同様に厚さ30cmほどの耕作土の下は黄色シルト層（地山）である。この黄色シルト層で、前述の溝を検出している。この溝は、東西にのび、上端幅1.1m・深さ50cmを測る。断面は、底はほぼ水平で立ち上がりは逆八の字形を呈する。また、トレンチ東壁沿いでは底がやや高くなっている。溝内の埋土は、茶褐色土・灰褐色土・灰色粘質土の3層からなり、灰褐色土層には、杭や木の枝・木片等を含んでいる。溝内から土器は出土していないが、耕作土からは、常滑焼・土師器の小片が出土している。

杭（図4）は、溝から出土したものである。茶褐色土層に、ほぼ水平に横倒しの状態で検出された。現存の長さ43cm、直径2.5cmを測る。先端は5cmほど斜めにカットしているが、その他の部分については特に加工した様子はない。

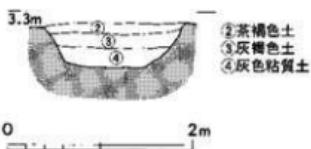


図5 溝セクション図

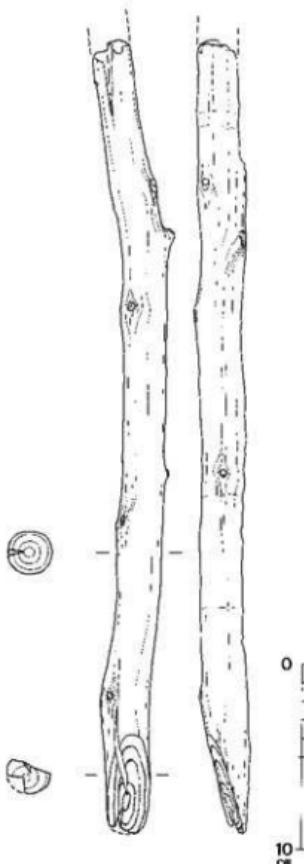


図4 第2トレンチ溝出土木製品

(3) 3トレンチの概要

このトレンチも、耕作土の下は、黄色シルト層となる。遺構は、まったく検出できなかった。図(6)は、壺の口縁部である。外面には、沈線が施されており、頸部以下へラケズリされている。

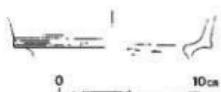


図6 第3トレンチ出土遺物

(4) 4トレンチの概要

このトレンチは、調査区北西に 6 m × 6 m で、設定した。基本層序は、耕作土・黒灰色土・黄色シルト層（地山）である。この黄色シルト層より 10 cm 下は砂疊層となり、南西隅では黄色シルト層がなく黒灰色土層の下が砂疊層になっている。

黒灰色土は、弥生中期から近世にかけての遺物を含んでおり、小片であるが古墳時代初頭の土師器と中世陶器（常滑焼）が目立った。遺構は、溝 1・ビット 5 個を検出した。遺構は、黄色シルト層（地山）か、溝の埋土に掘り込まれており、黒灰色土からは、遺構は検出されなかった。

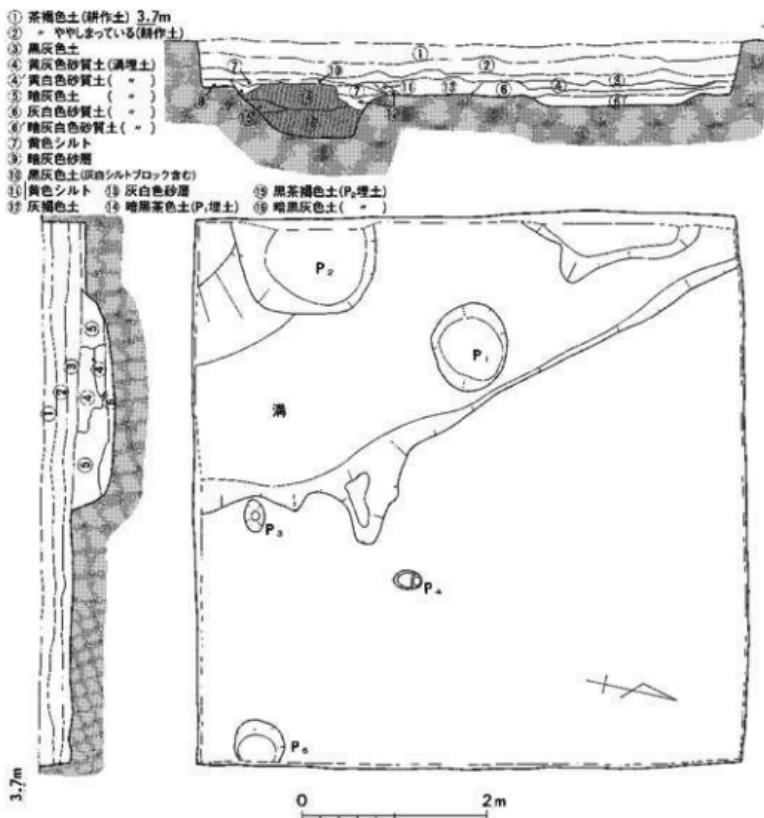


図7 4トレンチ遺構図

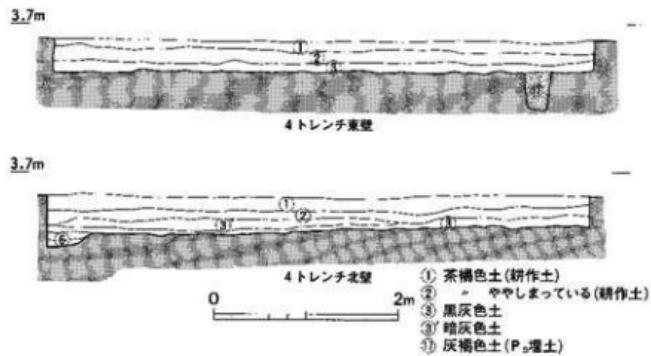


図8 セクション図

遺構外出土遺物（図9）

(1)・(3)は耕作土からの出土であるが、その他は黒灰色土層からの出土である。(1)は、弥生中期の壺の口縁部である。2条の凹線とその間に列点文が施されている。(2)は、壺の口縁部である、段はしっかりとおりシャープに外方に突出している。口縁部内外面ともナデ調整で胴部内面以下はハラケズリしている。(3)は、須恵器で杯の底部である。高台は断面三角形でハの字開いている。また、内面は2

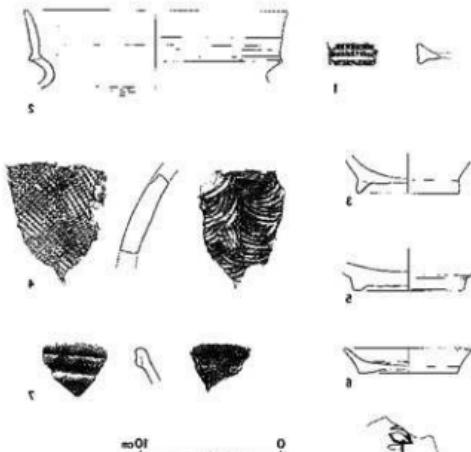


図9 遺構外出土遺物

次焼成を受けており炭化物が全面に付着している。(5)は、白磁碗の底部である、内面のみ釉がかかっており弱冠青味がかっている。(6)は、土師質土器の杯である。口縁部は、外反して立ち上がり、端部はシャープにのびる。底部外面には墨書がある。内面は、2次焼成を受けており黒くなっていることから、燈明皿として使用されていたようである。

溝

トレーナーの西側での部分的な検出であるが、南壁のセクションより溝と判断した。上端幅2.4m・下端幅1.8m・深さ0.52mを測る。断面は皿状を呈しており、埋土は粒

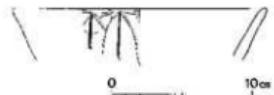


図10 溝出土遺物

子の細かい砂質土層である。黄色シルト層に掘り込まれている。しかし、南西コーナーにある高まりが西側の立ち上がりになるが、この部分は砂礫層になっており、黄色シルト層は検出されなかった。

溝出土遺物

黒灰色土層から青磁(図10)が出土している。蓮弁の楕の口縁部で、釉は淡い緑色を、断面は灰白色を呈する。

ピット1

このピットは、溝の埋土から掘り込まれており、直径96cm・深さ52cmを測り平面プランはほぼ正円形である。断面は逆八の字に傾斜し深さ40cm、ちょうど砂礫層に達するところで幅15cmの段となり、そこから10cmほどおちる。出土遺物としては、政和通宝(図12)が1点出土している。

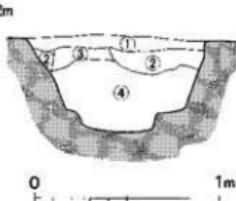


図11 4トレーナー
P1セクション図

ピット2

このピットも溝の埋土より掘り込まれている。トレーナー南東隅での検出であったため全体は明らかでないが、直径1.48m・深さ0.56mを測る。東壁セクションを見ると北側の上部が攪乱を受けている。遺物としては、土師器の小片が数点出土しており、またピットの北壁に沿って杭が検出された。



実寸
図12 P1出土遺物

ピット3

このピットは、溝のすぐ脇にあり、黄色シルト層より掘り込まれている。平面プランは、梢円形で東西36cm・南北10cm・深さ37cmを測る。遺物は出土していない。

ピット4

南北30cm・東西10cm・深さ21cmを測り、平面プランは梢円形を呈する。

ピット5

トレーナーの南東コーナーに位置し、直径52cmの正円形プランを呈し、深さ40cmを測る。出土遺物としては、弥生土器が1点と土師器小片が2点出土している。

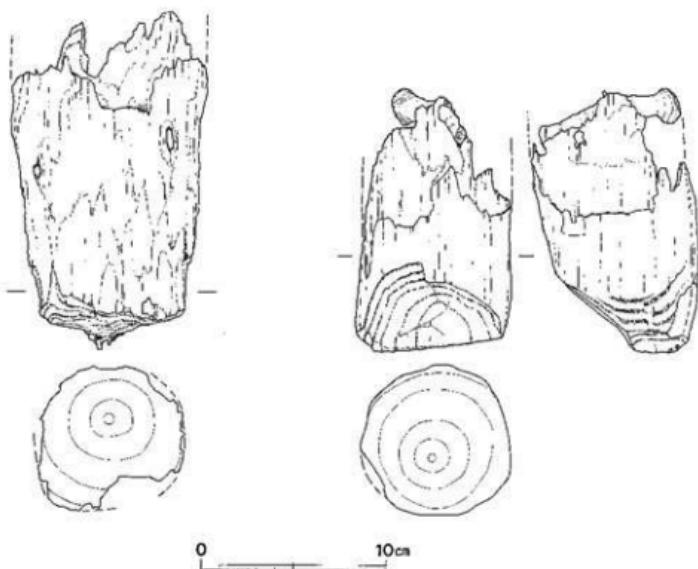


図13 4 ドレンチ出土木製品

3. B 地区の調査

(1) 5 トレンチの概要

この辺りは、水田を埋め立てているようで、③黄褐色土より下が造成前の旧水田土である。黄色シルト層は、部分的にみられるのみで灰白色シルト層があり、砂礫層となる。

- | | |
|--------|-------------|
| ①耕作土 | 7灰黄色土 |
| ②褐色土 | 8灰黄色砂質土 |
| ③黄褐色土 | 9灰色粘質土 |
| ④黄灰色土 | 10黑色粘質土 |
| ⑤暗黄灰色土 | 11黄色シルト(地山) |
| ⑥黄橙色土 | 12灰白色シルト(-) |

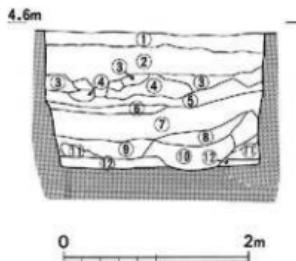


図14 5 トレンチ南壁セクション図

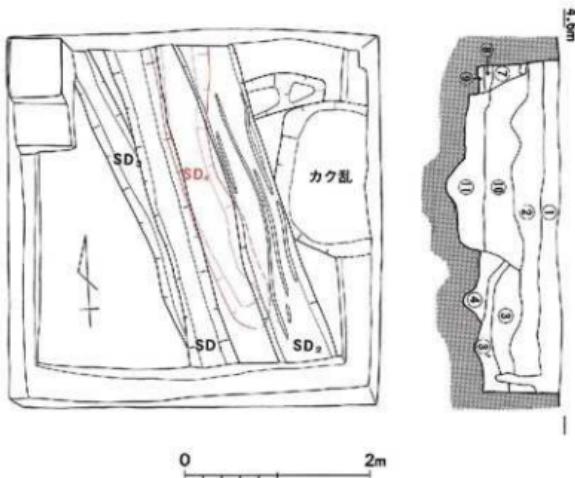
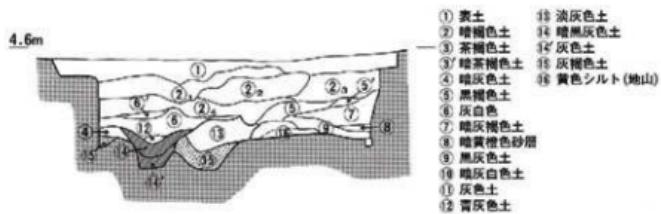


図15 6 トレンチ遠構図

(2) 6トレンチの概要

このトレンチは、調査区の西側に設定した。基本層序は、表土・暗褐色土・茶褐色土・暗灰色土・黄色シルト層（地山）で、黄色シルト層より20cm下は砂礫層になる。暗褐色土・茶褐色土には、焼し瓦や石が投げ込まれていることから、埋め立てをしているようである。

遺構としては、溝を4本・土壤1を検出した。溝はすべて南北方向に伸びている。

SD1・SD2

SD1は、暗灰色土層より掘り込みSD2を一部壊している。上端幅80cm・下端幅28cm・深さ28cmを測る。SD2は、上端幅70cm・下端幅53cm・深さ24cmを測る。SD2は、木材が立てられており暗渠の可能性が考えられる。この2つの溝からは瓦・陶磁器が出土しており、とともに近代のものと考えられる。

SD3

SD1に切られたり一部しか検出できなかったが、黄色シルト層に掘られており、幅30cm・深さ12cmと小さな溝である。出土遺物として土師質土器の杯が出土している。小片ではっきりしないが糸引き底のようである。

SD4

SD2の真下より検出しており、上端幅64cm・深さ30cmを測る。出土遺物はなかったが、黄色シルト層に掘り込まれていることや、埋土が、SD3と共通していることから同時期のものと考えられる。

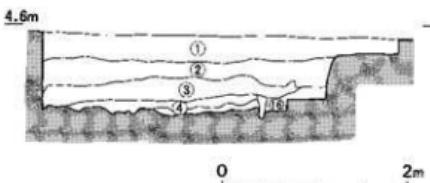


図16 6トレンチ西壁セクション図

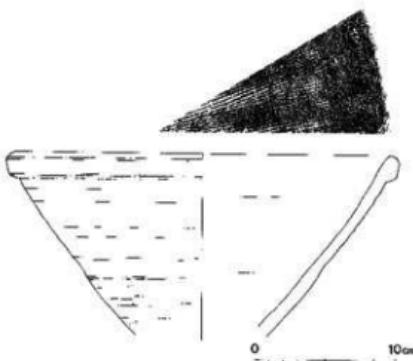


図17 SD1出土土器

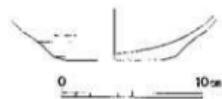


図18 SD3出土土器

4. 四絡遺跡群の概要

出雲平野のほぼ中央部に位置する矢野町・小山町・大塚町・姫原町・渡橋町を四絡地区と呼んでおり、矢野遺跡・小山遺跡・大塚遺跡を四絡遺跡群と呼んでいる。これらの遺跡は、東西1km・南北1.2kmに渡り周囲の水田面より1m程度高い神門川の同じ旧自然堤防上に位置している。小山遺跡は1～3地点・矢野遺跡はこれまで5地点確認されていたが、出雲健康公園（出雲ドーム）建設に伴う調査によって、新たに第6地点発見され、第2地点はさらに範囲が広がることが確認された。また、今回の分布調査で渡橋町でも遺物散布地を1か所確認している。

四絡遺跡群は山本清による大塚古墳（大塚町）の報告が初出で、その後、四絡小学校敷地内やNHKラジオ放送所敷地内より土器が採集され、矢野・小山・大塚と四絡地区一帯に遺物が散布することが確認された。

1953年には、山本清と旧島根県考古学会により第1地点の発掘調査が行われており、貝層が確認されている。以後矢野貝塚（現在の第1地点）として知られるようになり、市の史跡に指定されている。

出雲平野の弥生時代・古墳時代の集落の動向について体系的にまとめ、その中で矢野遺跡を位置づけたのは出雲考古学研究会である。四絡遺跡群については、綿密な分布調査を行い、遺物の散布密度から矢野遺跡を1～5地点、小山遺跡を第1～3地点に区分し紹介している。特に矢野第3地点からは吉備の特殊土器が表採されていることや、遺跡全体を見ても他の遺跡と比較して遺物の量が多いことなどから、矢野遺跡を出雲平野の拠点集落として位置づけている。

この出雲考古学研究会の基本的な作業を受け継いだ形で、島根大学の田中義昭を中心とする出雲集落遺跡研究会により矢野遺跡を中心に発掘調査が継続して行われている。

以下、これまでの成果を踏まえ、四絡遺跡群の概要について述べる。

矢野遺跡

第1地点

矢野遺跡の中心部に当り、前述のように矢野貝塚として知られている。微高地の最も高いところに位置し、現状は畠地で、周囲は宅地となっている。1953、1971、1973年に、トレンチによる調査が行われており、黄色シルト層よりヤマトシジミを中心とする貝層や土塊墓と思われる遺構が検出されており細身の管玉が出土している。土器は弥生後期のものが量的に多く、弥生時代前期から古墳時代初頭まである。また、縄文後・晩期の土器が弱冠表採されている。

第2地点

新内藤川より北の部分で、矢野神社付近の畠を中心に東西300mの範囲に広がっている。

1985年に出雲集落遺跡研究会によって、矢野神社の周辺にトレンチが入れられている。遺構としては、近世と思われる溝状遺構と、古墳時代初頭の竪穴住居と考えられるものの一部と、これに伴うと思われる柱穴が検出されている。また、1990年出雲健康公園（出雲ドーム）建設に伴う調査において古墳時代終末～中世にかけての良好な集落跡を検出している。特に13世紀末～14世紀初の屋敷地からは青磁・常滑焼・木簡やその他多くの木製品が出土している。

第3地点

1986～87年にかけて出雲集落遺跡研究会によって発掘調査されている、しかしながら、近世以降の埋立などさまざまな攪乱を受けており、良好な遺構は検出できなかったものの、大量の土器・石器が出土している。土器については、弥生中期中葉～後期中葉を中心に弥生前期から古墳初頭まである。また、吉備から搬入されたと考えられる特殊土器・特殊器台が出土している。玉作関係の遺物も出土しており、玉生産を行っていたようである。

第4・5地点

第4地点は、微高地の南縁に辺り、旧河道と考えられる水田に面している。第5地点は、微高地西側の水田中にあり、水路が掘削された際に、遺物が採集されている。

小山遺跡

第1地点は、出雲集落遺跡研究会によって、トレンチによる発掘調査が実施されており、弥生後期・古墳時代初頭・中世の遺構が検出されており、金属滓なども出土している。

第2地点は、旧河道と考えられている県道出雲・大社線に沿った水田の南側の旧自然堤防上に立地している。

第3地点は、旧四絆小学校の増築・NHKラジオ放送所建設の際に遺物が出土している。

大塚遺跡

小山第3地点と同じ旧自然堤防上の北西に位置している。善哉寺の北に畠地が広がっており、須恵器等の土器片がかなり分布している。また、善哉寺の南には、大塚古墳がある。しかしながら、詳細は不明で、一説には尼子対大内の合戦の戦死者の寄墓とも伝えられている。



四絃地区道路分布図 (1 : 7500)



渡橋遺跡

今回の分布調査による新発見の遺跡である。小山第1地点より南へ1.5km離れた旧自然堤防上に立地している。現在は、わりと広い畑地となっており、土師器片が散布している。標高5.6mで周囲の水田面より80cmほど高くなっている。

5. まとめ

今回の発掘調査では、矢野遺跡の南東部分の広がりを確認することを第一の目的とした。調査地は、A地点・B地点に分けトレンチを6か所に設定した。A地点は、現在は、水田となっており、B地点は旧河道と考えられる水田に面しており、現在は、水田を埋め立てて畑となっている。

検出した遺構は溝とピットなどわずかではあったが、遺跡の広がりと時期についておさえることができた。

A地点において検出した遺構からは、土師質土器・青磁・常滑焼などが出土しており、13世紀末～14世紀初めの墳のものと思われる。4トレンチでは、地山（黄色シルト層）直上の黒灰色土層より古墳時代初頭の遺物が中世の遺物と共に出土しているが、これらは流れ混んできた可能性もあり、弥生～古墳の確かな遺構は検出できなかった。

出雲ドーム建設に伴う矢野第2地点の調査においても、約4000mと広い調査範囲であったが、弥生時代の遺物はほんの数点で、古墳時代終末の遺構が最も古く、平安時代・中世の遺物・遺構を中心に検出している。今回の調査と合わせて考えると、矢野遺跡の立地する微高地の東側の現在水田になっている部分は、平安時代～中世にかけて、集落が拡大している可能性が強く、現在の遺跡の推定範囲より50mは東に広がるものと思われる。

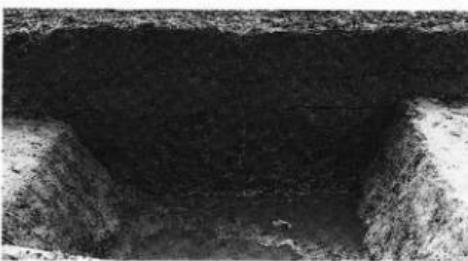
分布調査では、四経地区の南部の姫原町・渡橋町について、重点的に実施した。両地点とも宅地化が進んでおり、分布調査の可能な場所が少ないとおり、遺物の散布をあまり確認できなかったが、渡橋町の西側で1か所確認した。立地的にも周囲の水田より80cmほど高くなっている、この辺り一帯が遺跡である可能性は高い。



A 地区調査前状況



1 トレンチ溝検出状況



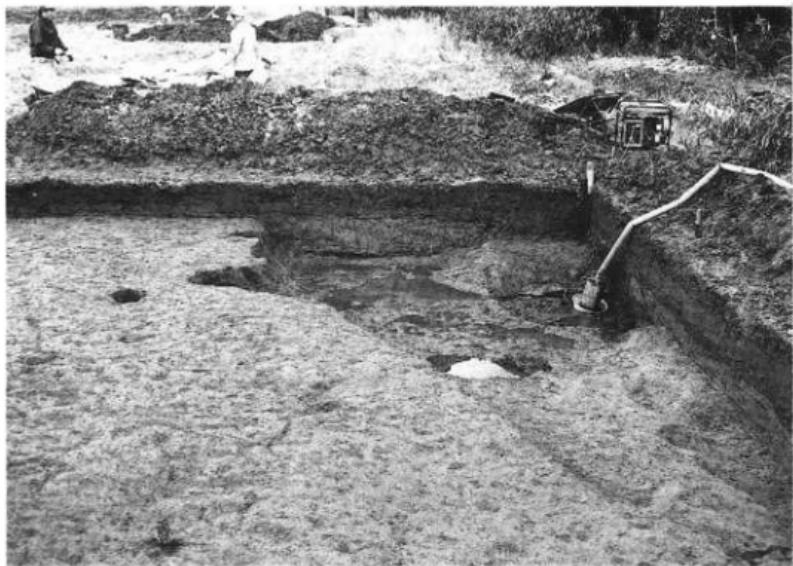
2 トレンチ溝セクション



2 トレンチ溝完堀状況



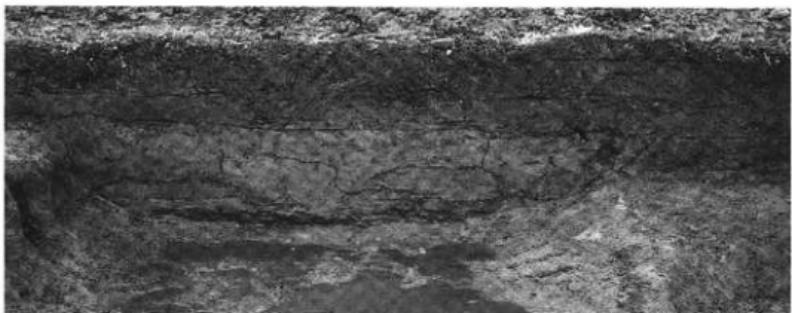
2 トレンチ溝杭出土状況



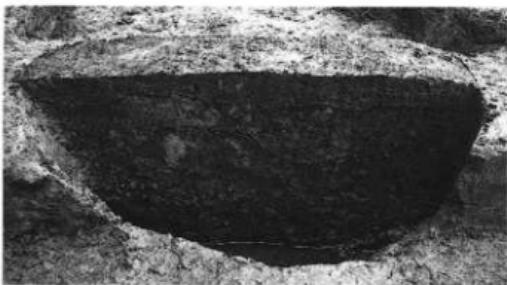
4 トレンチ溝完掘状況



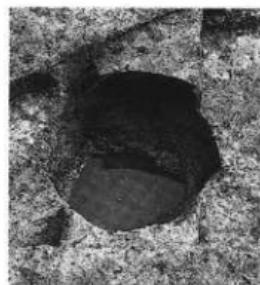
4 トレンチ西壁セクション



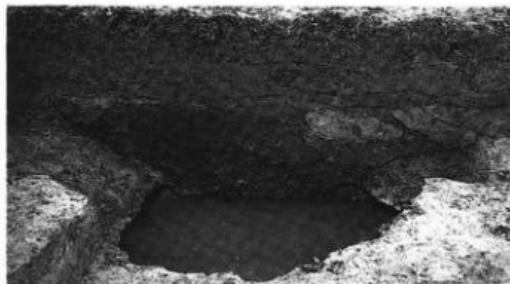
4 トレンチ溝セクション



Pit 1 セクション



Pit 1 完掘状況



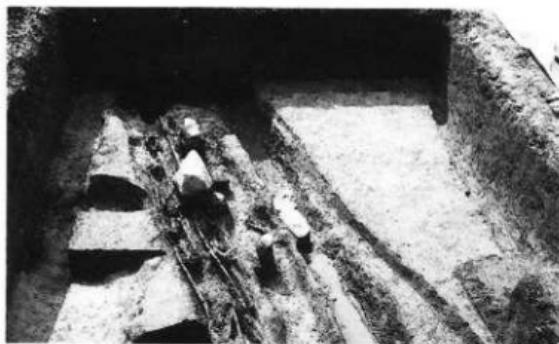
Pit 2



B 地区調査前状況



5 トレンチ
南壁セクション



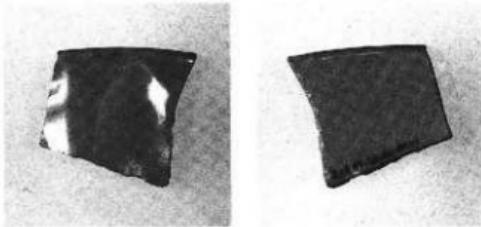
6 トレンチ完掘状況



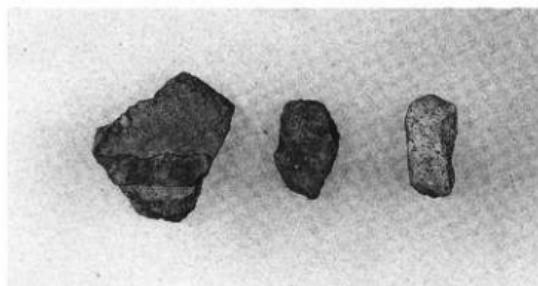
6 トレンチ
北壁セクション



2 トレンチ溝出土木製品



4 トレンチ溝出土青磁片



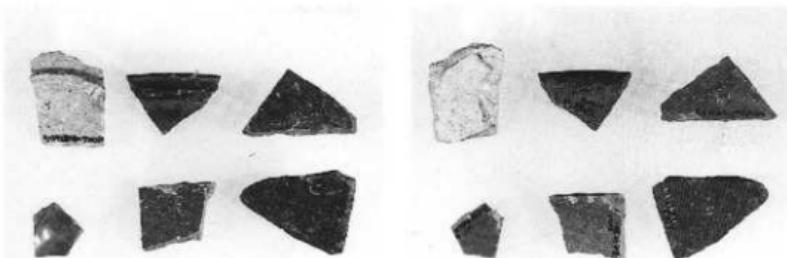
4 トレンチPit 5 出土遺物



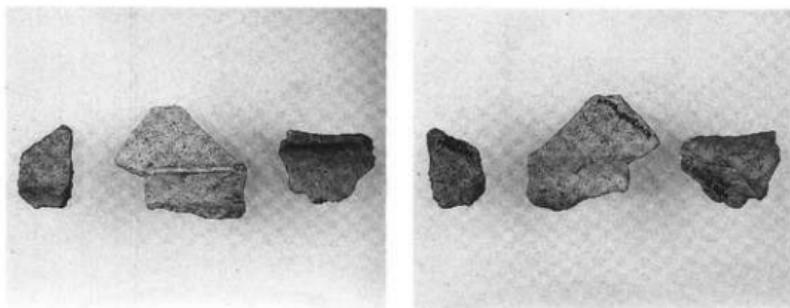
4 トレンチPit 1 出土遺物



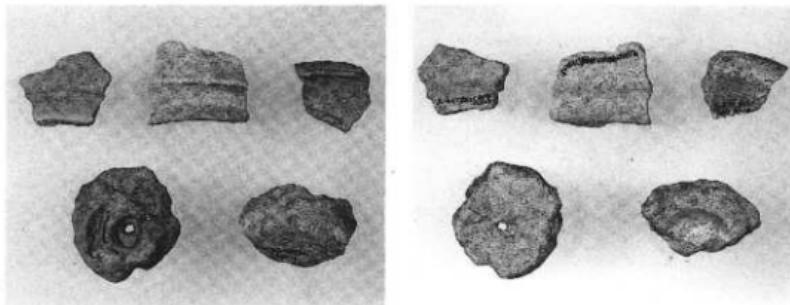
4 トレンチ出土墨書き器



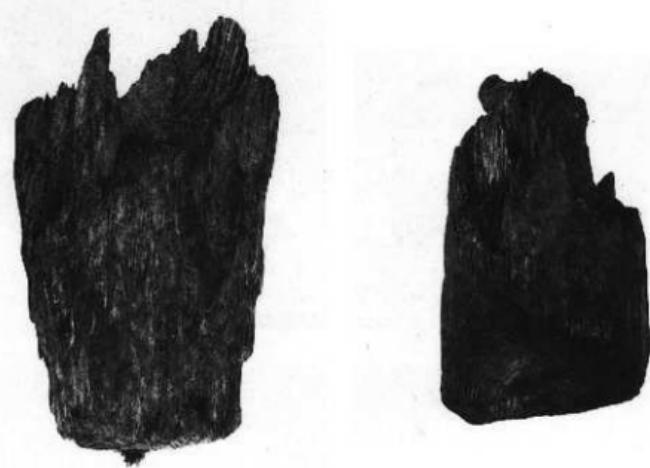
4 トレンチ出土陶磁器



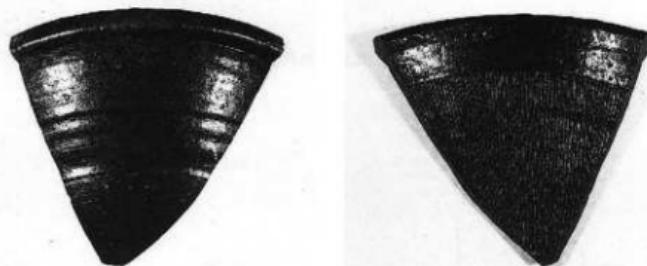
4 トレンチ出土遺物(黒褐色土層)



4 トレンチ出土遺物



4 トレンチ出土木製品



6 トレンチSD、出土遺物

平成4年(1992)3月 発行

四格地区発掘調査報告書

編集・発行 出雲市教育委員会
出雲市今市町北本町3丁目1-6
印刷・製本 伊藤印刷
出雲市白枝町423